

9章 見えるようになる

- 弟子たちの問い(罪の因果論から ロマ5, 1 2以下参照)
- イエスの答え(目的論的)
- イエスの行為のメタファー(創世記2, 7から新しい創造、創世記3, 7: アダムとエバは罪を犯して目が開け、新しい人間は罪を清められて目が開ける)。(創世記21, 9 - 21)
- 目が見えないことのメタファー(神(の愛の働き)に気づかないこと)

9章 つづき

- シロアムの池に行って洗うことのメタファー(洗礼)
- 11節「見えるようになった」(= アネブレポー = 上を見る = 神の愛を知る)
- 12節(愛の主体は、働いた痕跡だけをわずかに残して、姿を隠す)。

10章 羊飼い

- 旧約聖書のなかの「羊飼い」= 族長、モーセ、ダビデ・・・詩編
23編、エレミヤ31, 10; イザヤ40, 11; エゼキエル34, 1
- 31 神の比喩(父と子、母と子、夫と妻、王と僕)。
- ヨハネ エゴー・エイミー + 羊飼い

11章 ラザロの復活(1)

- イエスは、ラザロが病気だという知らせをヨルダンの向こう岸(10:40)で聞いた。しかし、すぐに飛んでいくのではなく、不思議なことに、「なお2日間、同じ所に滞在された」(11:6)。そしてその間にラザロは亡くなってしまった。
- マルタ(21節)もマリア(32節)も「主よ、もしあなたがここにいてくださったなら」と言っている。かんじんの時に救い主がいない、不在なのだ。そして救い主が不在であることによって、マルタとマリアにとってはかけがえのない弟ラザロは永遠に不在となってしまった。
- しかし、不思議なのは、イエスが「この病気は死ぬほどのものではない」(4節)と言っていたのに、亡くなってしまったり、「私の友ラザロが眠っている」(11節)と言っている。かと思つて、次にはあからさまに「ラザロは死んだのだ」(14節)と言って、まるで弟子たちをからかっているかのようだ。なぜ、このように互いに矛盾することが語られているのだろうか。

11章 ラザロの復活(2)

- もっと不可思議なのは、イエスは15節で、直訳すると、「私が「そこに」いなかったことを、私はあなたがたのために喜ぶ」と言っていることだ。悲しみの極致にあるマルタとマリアに対して、「喜ぶ」とは何事か。それは、「あなたがたが信じるようになるためである」という。この「あなたがた」は、狭い文脈上はもちろん、弟子を指している。イエスが間に合わず、ラザロが死んでしまったのは、イエスがラザロをよみがえらせる奇跡を行なうのに都合がよかった、つまりそれによって人々が信じるようになるため、また4節にあるように「神の栄光のため、また神の子がそれによって栄光を受けるため」という意味に理解することもできる。しかし、それは筋の上、表面上の意味にすぎない。
- ここには、よみがえりということは、いったいどういうことなのか、そして、それを信じるとは、いったいどういうことなのかを、なんとかして伝えようとしている意図が込められているのではないか。それはイエスが「そこに居合せなかった」ことの深い意味としてのことだ。イエスは「そこにいなかった」、だからこそ、マルタもマリアも「もしあなたがここにいてくださったなら」と、イエスの不在を嘆き、そしてまたラザロの不在を悲しんでいる。

11章 ラザロの復活(3)

- しかし、「そこ」「ここ」という不在の場こそ、じつは深い次元での確かな存在に出会える場にほかならない。だから、イエスは「私がそこにいなかったことを、私はあなたがたのために喜ぶ」と言われているのではないか。そして、そのような深い次元での確かな存在について、イエスはさらに、「私はよみがえりであり、命である。私を信じる者は、たとえ死んでも生きる」(25節)で言っているのだ。
- 私たちは、ふだんの日常生活では、誰かがいない、そばにいてくれない、という不在を、ただ単なる不在としてしか感じることはできない。しかし、ここに今、居て欲しい人、愛する人が今いない時、じつはその人がいないという淋しさのなかにこそ、愛する人はその人の淋しさと一体になって、そこに共にいるのではないのか。

11章 ラザロの復活(4)

- 不在を悲しむマルタとマリア、それに反して不在を喜ぶイエス。この相反する不在への関わり方の交わるところに、不在の真相が見え隠れしている。不在の場こそは、すべてのものを一つにする神の愛の働く場に他ならない。
- この不在の真相、リアリティの反転に気づくこと、まさにそのことの大切さをヨハネはここで矛盾にみちた仕方で語り、…今、ここにいないという不在のただなかに、永遠のいのちの相に照らされつつ、今ここに、「だれか」が「共に」いるのだ。
- イエスがマルタに向かって「このことを信じるか」(26節)とたずねられたときの「このこと」とは、この不在の真相のことである。そしてじつはそこにおいて、イエスがよみがえりであり、永遠の命であることを信じる信仰が、まさに問われているのである。